

鈴木哲雄著『唐五代禪宗史』

一

本書は、著者が「南宗禪の発展過程の研究」と題して駒沢大学に提出された学位請求論文の中から、第二編「年表」と第三編「祖堂集対照景德伝燈録」の資料篇を削除して、『唐五代禪宗史』と改めて公刊したものである。本書を手にした人は、鈴木哲雄博士の処女出版である『中国禪宗人名索引』（其弘堂、昭和五〇年九月）にみられたあの「該博な資料・緻密な論証・厳しい方法論・客観的な批判精神」（「序」）という姿勢が、くずれることのなく本書にみごとに結実しているのを発見することであろう。同じ分野を専攻する一人として、本書の公刊が容易でないことが理解できるだけに、学位取得ならびに学位論文の公刊に心よりおよろこびを申し上げ、その御苦心に対して御慰勞の言葉をささげるものである。

さて、本書を紹介したいと思うが、本書には、主査であった鏡島元隆博士の学位審査報告の概略が「はしがき」に印刷に付されており、本書の内容と特色がきわめて簡潔に示され、みごとな紹介と批評となっていて、筆者にこれ以上に加えるべき言辞はとても望めそ

石井修道

うにないと言うのがいつわらざる気持である。また、副論文として提出された『唐五代の禪宗——湖南江西篇——』（大東出版社、昭和五九年七月）については、前号に永井政之氏の達意的な「書評・紹介」もあって参考になる。ここで充分にその任を果たしえないかもしれないが、最近の禪宗史研究上の最大の成果の一つであることは誰もが認めるものであり、それを紹介しないのはかえって礼を失するので、筆者なりに紹介と読後感を記しておきたい。

本書の著者が取った研究方法については、著者は次のように記している。

長い禪宗の歴史の中では禪思想の表白は決して一様でなく、多彩な相貌を提している。禪宗教団も歴史の制約の中で生きているのである。また祖師方にしても歴史の制約の中にある。隋唐時代からそれ以後は、仏教教団は次第に強くなっていく国家権力の枠の内に嵌め込まれ、時代と共に生きていかなければならなかった。

出世間的な僧伽は世間の中の出世間的僧伽となった。それは仏教教団の世俗化に一步足を踏み入れることにもなった。禪宗教団が発展し、多様化し、歴史の流れの中で抑揚消長あり、変化屈折あ

る点に目を向け、その中で禅宗の特徴を見極めようとすると、学問的には禅宗史の分野となる。特に五家という特徴を持った宗派の消長を探り、相互及び次代への影響を論じていくことが中心課題となる。それはいわば法系を歴史に絡ませて見ていく方法でもある。この方法は禅宗の流れを俯瞰的に知るのに最もよく、またよく纏まった整理の仕方である。それで禅宗史は概ねこの方法で論ぜられるのである。ただ難点は国家とか社会の歴史と対応させる面に乏しく、法系史となってしまうことである。歴史観を明確に持たないと真の禅宗史とは言い難いのではないかと考える。(四〜五頁)

著者の取る禅宗史の方法論は、従来の研究が単なる法系史で真の禅宗史になりえていないという批判の上で、著者独自の新たな意図が試みられるのである。

その地に根付いた教法でなければ、仏教の確固たる受容もなされなかつたことは、古くから仏教の歴史が証明するところである。たとえ一国内といえども、中国のような広汎な境域をもつ国家は、北地と南地では氣候風土も違い、民情も特色を異にし、それに応じて文化も違いをあらわしている。東部と西部でもやはり同様である。法において一条鉄である禅宗にあつても、その發揮する様態においては、教条的一様さであるはずもなく、地方に応じた特色を發揮したものと充分に予見せらる。

地理的な要素を考慮に入れて禅宗の様態を見ていこうとする研究態度は、既に宇井伯寿博士の『禅宗史研究』三部作の中に表れている。しかし法系を主としたもので、地理的要素はあまり表に出てきてはいない。筆者は前述の理由から、地理的要素を表面に出

して禅宗の様態を論じてみようとするものである。また前の研究分野で言えば禅宗史に属する。歴史との関係も考慮に入れて、禅宗がどのように発展変化していくのかを考察してみようとするものである。(六頁)

ただ地理的研究を加えたといっても、無闇にそれを導入していいところが鈴木博士の批判精神の存するところで、本書の長所として次の言葉は絶対に見落してはならない箇所である。

地方志に述べることをそのまま信ずることは危険である。(二五頁、二六八頁参照)

この点だけを充分に注意しながら読者が本書を読むと、従来の禅宗史の研究と本書との違いは、地方志や金石類が多く使用されて地方の特殊相を明確にされた点であることに気付であらう。その点では、宇井伯寿博士の『禅宗史研究』三部作とは比較にならない精緻さと広汎さを本書はもつものである。それは著者が副論文を工具書の性格をもつといわれる点とも関連するが、地域と時代の制約は存するものの、今後の研究者が必ず利用しなければならぬ書といえるし、また、その利用に充分に応えることのできる内容をともなっているのが、副論文と共に本書の特色であり且つ長所である。

このように従来の禅宗史に欠けていた地理的要素を補足した本書は、歴史的視点に地理的視点を加味して、禅宗史の大きな流れを見透しながら、広東・湖南・江西・福建・浙江・江南の六つの地域に分けて、地域別の特色を探ろうとするのである。その時、禅宗史の時代区分を検討して、次のような著者独自の時代区分で論が展開されている。

1 開拓期 五祖弘忍より石頭馬祖まで(一七九〇年頃)

2 伸張期 葉山百丈より洞山仰山徳山石霜夾山まで（七九〇年頃〜八八〇年頃）

3 隆昌前期 雲居曹山雪峯より徳山縁密法眼文益まで（八八〇年頃〜九四〇年頃）

4 隆昌後期 梁山縁観天台徳韶より伝燈録記載末まで（九四〇年頃〜一〇〇〇年頃）

この時代区分が決定されるには、安史の乱の与えた影響、会昌の破仏が引き金となった五家の成立、五代の諸国の滅亡から宋の建国が視野に入れられている。特に伸張期に対する著者の意見は、禅宗史の把握の上で傾聴に値しよう。

開拓期から伸張期への推移は、安史の乱による歴史の変化に応じたものであるとみることができる。唐代一代の中で仏教に最も衝撃的打撃を与え、時代に応ずる変化を促したものは、会昌の破仏（八四五年）であった。滙山・洞山・臨濟・徳山・仰山・石霜・夾山・巖頭・雪峯等は皆この厳しい情況に置かれた人たちであった。この人たちの中から五家の内の三家が出てくる。あとの二家、雲門と法眼は五代時代に入ってから出てくる。いったい五家というも後の分類で、五家に入らぬ徳山・石霜・夾山・巖頭・雪峯ら是一家を成す十分な力量を具していたのである。また他に趙州・投子・徑山鑑宗等多くの人が出てくる。この現象は新しい波によって生じたものと言って過言でない。筆者はこの新しい波の元は会昌の破仏にあると読む。破仏は五家の成立の引き金となったのである。しからば八四五年が切れ目であるが、この影響による対応が禅宗の中に顕現したのは、洞山・石霜・夾山の末年頃と言えよう。この頃になると唐朝は形骸化し、地方は群雄割拠の様相を

呈してくる。唐朝が崩壊し五代時代に入る九〇七年は形式的時代の切れ目である。それも含めて八八〇年頃を伸張期と隆昌前期との境としたのである。（九頁）

ここに明らかなように、著者の禅宗史の時代区分に関する基本的な考えは、

禅宗の時代の変化に応じた反応の表れは、荷沢の場合は例外であって、全体に歴史の動きに少し遅れるようである。それは単なる情況に応じた反応ではなくて、禅思想に依じて生ずる、内奥の響をもった反応であるからである。（九頁）

とあるように、社会変化即禅思想変化とするのではない。後に問題にされる「宗派の成立」の論の分析と連関するが、著者の独自の立場を明確にしている箇所である。

こうして、本書は、前編の「地方別にみた禅宗発展の様態」が著者独自の方法をもって明らかにされ、その結果を踏えて後編の「禅思想の展開」がどのような内容であるかが論じられるのである。

以下に、前編と後編を分けて具体的に紹介することにしよう。

二

著者が本書をまとめられる以前の主な論文をあげると、「唐・五代の福建における禅宗」（『愛知学院大学文学部紀要』第三号、昭和四八年一二月）、「浙江の禅宗に関する資料——唐・五代——」（同五号、昭和五〇年一二月）、「浙江における唐末までの禅宗の推移」（『日本仏教学会年報』第四一号、昭和五一年三月）、「浙江における禅宗の推移——五代時代について——」（『禅研究所紀要』第六・七号、昭和五一年一二月）、「江西の禅宗に関する資料——唐・五代——」

(『愛知学院大学文学部紀要』第八号、昭和五四年三月)、「湖南の禪宗に関する資料——唐・五代——」(同一〇号、昭和五六年三月)、「江南の禪宗に関する資料(上)——唐・五代——」(同第一二・一三号、昭和五七年三月、五八年三月)、「広東の禪宗に関する資料——唐・五代——」(同第一四号、昭和五九年三月)などがある。著者の論文は、これらに限るのではないが、以上の論文が副論文や本書と重複内容ではなく、もっと著者のいわれる工具書の性格が強いことを指摘する為に紹介したものである。つまり、鈴木博士の本書が成立する為には、カード化の作業とその綿密な分析を一度経ているのであり、そのことを知ることは本書の性格をより正確に把握できらるであろう。

ところで、副論文や本書の前篇に著者の独自の方法や特色があることを紹介してきたのであるが、著者の最終目的は前篇にあるのではなく、実は後篇にあることが著者自身によって明らかにされている。

本論は、南宗禪が時代の展開と共にどのように発展していったかを、特に地域の特色を明らかにするように努めながら、禪宗の内側に持つ本質と外側に表れた多様性を論じようとしたものである。本論はこの目的に添って、二つの柱を立てた。各地方の禪宗の発展していく動態を審らかにしようとしたのが前編の「地方別にみた禪宗発展の様態」であり、発展していく中で、熟して発酵していく禪思想がどのような内容のものであるかを論じようとしたのが後編の「禪思想の展開」である。前編では資料的性格を比較的に持たせた。個々の点について各資料間を比較対照し、瑣末な点にまで入って正誤を明らかにするよう努めた。個々の事象をできる

だけ正確に把握しておくことが、全体像を誤りのない方向に導くためと考えるからである。後編ではそれに基づいて、主たる内容を抽出し、禪宗発展の中に持っている思想的意味を伺おうと企図した。従って筆者の論ぜんとする比重は後編にある。(一〇頁)

本書の最終的に論じたいところは後編にあると明言されている以上、読者と共にその意向を汲んで内容紹介したいと思う。因みに後編について著者は、方法的に思想史を意図したとは強調されることはないが、著者の思想史についての考えを聞いておきたい。

禪宗史の中で特に禪思想の展開に視点を置いて論ずる時は禅思想史の分野となる。また菩提達摩以降については禅宗思想史とも称する。禅思想史の場合は歴史上との関連は全般的に後退し、禅思想の変化の過程が重点となる。禅の内奥に喰い込み、宗学とほぼ似てくるが、宗学が変化の過程を捨象するのに対し、それを重視する点で異なる。(五頁)

このことから理解できるように、禅思想史を最終的には企て、今後の研究の方向をそこに置かれていることが予想されよう。

「序論」につづく「前編 地方別にみた禪宗発展の様態」の目次を章と節のみかかげて、内容の検討に移ろう。

第一章 広東の禪宗

第一節 地理的概観

第二節 南宗発祥の開拓期

第三節 寂寥たる伸張期

第四節 雲門宗の興起した隆昌前期

第五節 衰退激しい隆昌後期

第二章 福建の禪宗

第一節 地理的概観

第二節 唐末より五代時代の福建——閩国——

第三節 福建の仏教

第四節 福建における禅宗の動態

第五節 隆昌期の福州の禅宗

第六節 閩王室と禅宗との関係

第七節 漳州及び泉州への伸展とその背景

第三章 浙江の禅宗

第一節 地理的概観

第二節 牛頭宗進出の開拓期

第三節 馬祖下全盛の伸張期

第四節 雪峯玄沙の宗風の挙揚せる隆昌前期

第五節 法眼宗爛熟の隆昌後期

第四章 江南の禅宗

第一節 地理的概観

第二節 牛頭宗発生の開拓期

第三節 牛頭宗の消滅洪州宗の発展

第四節 洞山雪峯下進出の隆昌前期

第五節 法眼宗形成の隆昌後期

第五章 その他の地方

第一節 湖南の禅宗の特徴

第二節 江西地方における各派の展開

このうち第五章は副論文の第三章に相当するものであるから、本書と互いに補完するものであり、両者相俟って前篇が完備するのである。地方別の特色をみながらも、著者は、「叙述の順序は、全体

的に要約した場合の禅宗の盛衰の流れによった。湖南・江西を含めれば、広東・湖南・江西・福建・浙江・江南の順となろう」(一〇頁)と云うように、地方と全体の連関をみながら禅宗史が構想されていることを注意しなければならないであろう。

さて、これら五章で取り扱われた事項は、著者の言葉を仮りれば「瓊末な点にまで入って正誤を明らかに」(一〇頁)された訳であるから、一つ一つを追って紹介はできないし、またその必要もないであろう。そこで、ここでは、第一に、著者が従来の研究史でいわれた定説に対して新たな見解を展開したり、あるいは等閑視されていたものに対して重要な意義づけを行なったもののうちいくつかを、筆者の判断において取り挙げよう。第二に、筆者が疑問に感ずるもののうちの気づいたものをあげることとしよう。

まず第一の場合を本書の順序にしたがって羅列することにしよう。

(1) 六祖慧能の最古の伝記資料とされる「瘞髮塔記」を『曹溪大師伝』後に成立したとし、広州の法性寺を強調するための資料と考える予測を提出し、問題提起とする。(二三、二九頁)

(2) 六祖慧能伝が長期間の在俗生活と同時に出家の経過を強調するのは、新興の科挙出身者と結びついた南宗禅の基本的性格と関わるのではないかと指摘する。(二八頁)

(3) 六祖下の翁山寺靈振の「靈池山碑」の紹介。(三五頁)

(4) 仰山慧寂は韶州南華寺通の下で出家し、通はそれ以前に婺州和安寺に住した人である。広州に和安寺は存しないこと。

(三九頁)

(5) 馬祖と石頭の両者の門下に配される韶州渚涇山と渚涇山、

華林善覺と潭州華林、義興勝弁と常州義興を同一人とする。

(四一頁)

(6) 石頭下の招提慧朗について、「韶州月華山花界寺伝法住持記」(『武溪集』卷九)を紹介し、新知見の晩年の韶州での行状を述べる。(四一頁)

(7) 葉山・百丈が参じた潮州慧照と南嶽懷讓下の潮州神照の同一人説。(四五頁)

(8) 会昌破仏後に曹溪の六祖塔を拜する風潮が出て来たことの指摘。(五三頁)

(9) 「韶州白雲山延寿禪院伝法記」(『武溪集』卷八)の新紹介による雲門下の白雲子祥一志文(聞)の伝記説明。(五六頁)

(10) 陳尊宿の七八〇―八七七年の生歿年は、雲門文偃伝から考えて寂年を数年下げるべきだとする問題提起。(六一頁)

(11) 雲門下の双峯慧真は、慧真広悟禪師竟欽その人を誤って別人としたもの。(六四頁)

(12) 嗣法の血脈は法系意識の強い雲門に端を発するとする説。(六八頁)

(13) 南塔光誦下の明徹大師黄連義初の資料「黄蓮山鐘款」(『金石統編』卷一二)の紹介。(六九頁)

(14) 『頓悟要門』の著者大珠慧海は、馬祖の初期の弟子の一人で、学地は建陽と推測。(八三、一四五頁)

(15) 黄滔撰「亀洋靈感禪院東壇和尚碑」により亀洋無了は、馬祖下ではなく、馬祖の流れを汲む者に参じたと推測。(八三頁)

(16) 黄滔撰「福州雪峯山故真覺大師碑銘」の現代語訳による紹介。(八六頁)

(17) 雪峰と同時に活躍した円寂大師を円智大師大安と推測し、阿部肇一説の鄴都円寂説は誤りとする。(九〇頁)

(18) 雪峯下の碑文に挙げられる人物と、歴史を経て評価される人物とが合致しない理由として、地理的配慮と年齢の問題とする指摘。(九三頁)

(19) 林澂撰「唐福州安国禪院先開山宗一大師碑文并序」の訓注による紹介。(九五頁)

(20) 径山第一世を、「潤州鶴林寺故径山大師碑銘」(『全唐文』卷三二〇)によって鶴林玄素と主張する。(一一七、一二五、一三七、二二三頁)

(21) 径山法欽の四つの碑の撰文、建碑問題の整理。(一二三頁)

(22) 「梅子熟也」の話における塩官と馬祖の混乱と塩官が蕭山の法楽寺の時代の話とする指摘。(一三六頁)

(23) 明心慧沐が参じた観音禪師を仰山慧寂と推定。(一二二頁)

(24) 台州の師彦、師静、師進の「師」は、諱ではなく尊敬語と推測する。(一七六頁)

(25) 浙江地方の『建中靖国統燈録』による法眼、雲門、臨済への発展変化の分析。(一八〇頁)

(26) 『宋高僧伝』はとかく神異を記述するが、『景德伝燈録』はそれを極力排除するという両書の違いの指摘。(一八二頁)

(27) 劉禹錫撰「牛頭山第一祖融大師新塔記」と李華撰「潤州鶴林寺故径山大師碑銘并序」の訓読文による紹介。(二一一、二二八頁)

(28) 牛頭宗における浄土志向による智威の思想とそれが完全に払拭される慧忠の禅思想の違いの指摘。(二二八頁)

(29) 傅大士作「行路難」と竜谷大学図書館所蔵の「行路難」の一致を主張する関口真大説への疑問と、それにかかわる牛頭慧忠の思想の分析。(二一九頁)

(30) 弘忍―法持―智威の法系から法融―智巖―慧方―法持―智威の牛頭宗の法系が成立する背景にすぐれた僧の出た延陵という土地の自覚があったとする推定。(二二七頁)

(31) 賈餗撰「揚州華林寺大悲禪師碑銘并序」の訓読文による紹介と荷沢宗の動向の分析。(二四〇頁)

(32) 独孤及撰「舒州山谷寺覺寂塔階故鏡智禪師碑銘并序」の訓読文の紹介と三祖僧璨の顕彰運動の分析。(二四九頁)

(33) 幽棲寺冲素を牛頭宗の人とする推定。(二六〇頁)

(34) 「故唐慧悟大禪師墓誌銘并序」(『徐公文集』卷三〇)の紹介。(二八二頁)

(35) 南嶽惟顛撰『続宝林伝』と『景德伝燈録』の中間に洞山清稟の著述が存し、『伝燈録』の成立に影響を及ぼしたことの推定。(二八四頁)

(36) 南唐の成立によって金陵は従来楊氏の外護を受けた僧から江西の清涼文益、清涼休復や福建の報恩清護が招かれて勢力に変化が生じたこと。呉の時代の曹洞宗は消滅し、南唐の時代には法眼宗が盛んになること。(二八五、二八七頁)

(37) 『宝林伝』は南嶽で成立し、道教の影響が考えられること。(三〇二頁)

(38) 葉山惟儼の宗風は馬祖下の者によく似ていること。(三〇五頁)

(39) 石霜慶緒の法系は、曹洞との親近性が逆に衰退を早めたこと。

と。(三〇六頁)

(40) 禪宗が法系を連綿と持ちつづけかつ仏教の主流となったのは、都市仏教と山岳仏教の二重構造を禪宗自身が持っていたこととの指摘。(三一六頁)

第二の点について述べておこう。

(1) 竜光澄記の伝で、舒州の山谷寺、齊安の竜光寺、金陵の竜光寺の三寺に住持したと解し、齊安が不明とするが(七〇、二九八、三〇一頁)、齊安は地名でなく金陵の齊安寺(浄妙寺ともいう)のことである。『金陵新志』卷一、「金陵梵刹志」卷四八参照。

(2) 鼓山神晏伝は、確かに不明な部分が多いけれども(九三頁)、『鼓山志』や『淳熙三山志』等を活用すれば今少し閩の王氏との関係も明らかになると思われる。

(3) 玄沙の碑文で、「不可誑於人也」を「人を誑たぶらかすべからず」(九六頁)と読まれているように、「終不敢誑於人」(もう誰にも騙されない)(五〇一頁)とするのは、「もう私は人をだましません」の意とすべきであろう。「禅文化」一一七号、一八頁参照。

(4) 招慶院の慧稜を継いだのは道匡とする(一〇八頁)の一般的なものであるが、このことについては拙稿「泉州福先招慶院の浄修禪師省僮と『祖堂集』」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四四号、昭和六一年三月)で述べたように省僮が慧稜の跡を継いだものと思われる。

(5) 「観音禪院碑銘」(『呉郡志』卷三二)を引用して、大中五年に洪憲が住したとする記事から、鈴木博士は黄蘗の弟子とす

る蘇州憲と千頃楚南は同一人説を主張される(一四〇、二六四頁)が、引きつづいて黄蘗の弟子が観音禪院(報恩寺)に住した可能性もあり、洪憲と楚南を同一人としなくてよいように思われる。

(6) 曹山本寂が鍾伝に招かれた時に大梅の「山居頌」をもって辞退した話は有名であるが、「山居頌」を「遷居頌」とする説(一四九頁)は、『祖堂集』巻八(Ⅱ—一三〇)や『曹山語録』(大正蔵卷四七—五三〇上)にある頌であって、「遷居頌」とはしない方がよいであろう。

(7) 不明とされる越州鏡清院は、『嘉泰会稽志』巻七に「景德院。在府東南六里七十四歩。唐天祐四年建。号鏡清」とあるのにあたるかもしれない。

(8) 陸亘は太和三年頃南泉を迎えたとされる(二六八頁)が、『唐方鎮年表』巻五、『嘉泰会稽志』巻二によれば太和七年閏七月以降のこととなる。

(9) 清涼休復伝の示寂の年を保大九年と主張される(二八〇頁)が、清涼寺に招かれた甲辰の歳(九四四)の方に疑問があつて、示寂は天福八年(九四三)一〇月一日とも考えられる。

(4)の拙論一八八頁参照。

(10) 廬山の冶父山は誤りで、冶父山は廬江県東北二十里をさすはずであるとする説は正しいと思われる(二八八頁)。しかし、大正蔵経は「廬山」とするが、四部叢刊本は「廬州」とするから問題はなく本文校定の必要があるろう。副論文の二二六頁の雲居道膺の外護者の周氏が不明とされるのも同じで、四部叢刊本では「鍾氏」となり、雲居の最大の外護者の鍾伝をさしている

ことが判明するのである。

以上の第一と第二の指摘は、筆者の偏った関心から述べた点多いことは認めねばならないが、前篇の紹介に替えたいと考える。

三

著者が重視された後篇の「禅思想の展開」の章節と項の目次を紹介し、全体の内容を概観しておくことにしたい。

第一章 南宗禅の確立

第一節 荷沢神会とその影響

一 荷沢神会の北宗排撃と思想構造

二 荷沢神会の見の思想

三 荷沢神会の五更転頌の背景

四 荷沢神会より壇経に至る見性の展開

五 保唐寺無住の「無念」について

六 『頓悟入道要門論』にみられる荷沢神会の影響

第二節 馬祖教団の禅思想の展開

一 江西における馬祖とその門下——年次考——

二 即心是仏から非心非仏へ

第二章 宗派の成立

第一節 南宗派下の宗派の発生

一 会昌の破仏とその影響

二 世代意識の発生

第二節 流動と展開

一 『景德伝燈録』に内在する史的な流れ

二 『瀕山語録』成立の背景とその性格

第三節 雪峯と玄沙

- 一 雪峯に関する資料の検討
- 二 戒律を重視した雪峯義存
- 三 玄沙師備と福建の禅宗
- 四 玄沙の禅思想

第三章 機と偈頌

第一節 禅における機について——時機観と関連して——

- 一 稀薄な時機観
 - 二 禅宗で用いる「時」の用例
 - 三 禅宗で用いる「機」の用例
 - 四 機の重視についての考察
- #### 第二節 禅思想表現としての偈頌

- 一 偈頌の成立過程
- 二 唐代の偈頌

系譜

地図

索引

英文梗概並びに目次

「第一章 南宗禅の確立」では、荷沢神会と馬祖道一を取り挙げたものである。

鈴木博士は、修士論文で神会を研究し、その研究成果である「荷沢神会論」(『仏教史学』第一四巻第四号、昭和四四年一月)を書かれた時に、学者としての将来性が認められるかどうかを勝負してみらつたりだと筆者に語られたのを思い出す、それだけに鈴木博

士の熱情が感じられる論である。その後には書かれた「南宗燈史の主張」(『敦煌仏典と禅』所収、大東出版社、昭和五五年一月)は、神会研究の最もすぐれた基礎論文の一つである。

本書の第一節の「荷沢神会とその影響」は、それらの集大成であるから、神会研究に欠くことのできない論であることはいうまでもない。神会の北宗攻撃を通して神会の思想を明らかにし、六祖慧能の思想をも明らかにする方法を取る。特に「二 荷沢神会の見の思想」や「四 荷沢神会より壇経に至る見性の展開」では、「見」および「見性」の語例の分析に独自のものがあり、その結果を踏まえて、慧能の主張する「見」もしくは「見性」が神会に受け継がれるが、『壇経』になると「見性」の内容的变化があると主張している。

「三 荷沢神会の五更転頌の背景」では、静岡大学教育学部国語科の卒論である曹植の詩の研究が十分に活かされたもので、五更転の性格や歴史を分析する。そして神会の五更転が俗講とのからみで成立し、有効な北宗攻撃を果たしたことを主張するのである。「五 保唐寺無住の「無念」について」や「六 『頓悟入道要門論』にみられる荷沢神会の影響」では、神会の影響を顕著に受けた『歴代法宝記』と『頓悟入道要門論』に言及し、その展開を示すのである。神会研究は、初期禅宗史研究で欠かせないものであるが、最近、竹内弘道氏の「新出の荷沢神会塔銘について」(『宗学研究』第二七号、昭和六〇年三月)で紹介されるように、六八四―七五八年の生歿年が主張されており、有力な説であるだけに、今後の神会研究は再検討を迫られている一面もあることを付け加えておきたい。

「第二節 馬祖教団の禅思想の展開」では、南宗禅の確立がいかなる経過をたどったかを、馬祖道一とその弟子の動向と教団の成立

で考察したものである。馬祖の教化地を福建建陽仏跡巖、江西臨川、南康郡贛公山、洪州開元寺の四箇所に分け、前篇でみた緻密な分析がここでもなされ、馬祖教団の性格が解明される。

「二 即心是仏から非心非仏へ」では、「1 南宗の中心思想」「2 即心是仏から非心非仏へ」「3 馬祖教団の発展」「4 非心非仏への展開の背景」の四項目とその資料を網羅して展開する。タイトルからも判明するように、馬祖禪を即心是仏のみで把握するのではなく、馬祖教団が大きくなるにしたがって洪州の開元寺では、教宗の拮抗から即心是仏の曲解を改めさせる必要に迫られて非心非仏を主張したとする。いわゆる馬祖その人に思想の変化があったという内容である。きわめて注目すべき主張であり、興味ある問題と思われるが、現存する資料でどれ程に馬祖の思想の正確な前後関係を知りうるのか疑問も残る。非心非仏の主張は馬祖その人ではなく、馬祖以降の教団がかかえた問題とも思われ、圭峯宗密の洪州宗批判も相手は黄蘗・潯山といった孫弟子に向けられたという指摘もあるので、今後の課題ともいえよう。

「第二章 宗派の成立」では、成立した南宗禪がやがて南宗の内部で相互に分派活動をし、やがて宗派の形成へと展開していった経緯を明らかにしたものである。

「第一節 南宗派下の宗派の発生」では、「1 会昌の破仏とその影響」において、南宗禪が変化した最大の要因として、会昌の破仏を取り挙げるのである。「2 世代意識の発生」では、江蘇地方の牛頭山に起こった世代意識が、つづいて各地の山や寺を中心に継承されたことを明らかにし、世代意識は宗派意識の一部もしくは変化したものと分析する。五家のうち世代意識の最初は洞山に起こり、

五代を経てセクト化し、一つの分類として五家が主張されるに至る経過が述べられる。やがて専制国家の宋朝になると、法系意識はより顕著になって定着するのである。

「第二節 流動と展開」では、「1 『景德伝燈録』に内在する史的な流れ」と「2 『瀋山語録』成立の背景とその性格」で、禅宗史上重要な『景德伝燈録』と『瀋山語録』の二つの禅籍から、禅宗の流動と展開を明らかにしようとしたものである。『景德伝燈録』が敦煌文書の発見研究以来、初期の記事の史実性が疑問視された為に一時的に顧みられなかった点を批判し、その性格と書のもつ意味を問いかけたものである。「2 景德伝燈録の諸本」では、『伝燈録』の版本の系統を整理し、「3 内在的流動——馬祖下を例として——」では、特に南泉普願が馬祖下の三大士角立と伝えられる経過や「牛頭未見四祖時」の公案の成立と伝承を具体化している。

『瀋山語録』は、五家の一つである瀋仰宗の重要な禅籍であるが、瀋仰宗は最初に成立しながらも最も早く衰亡する史実から、後世に「五家語録」に編成される過程とその意義を問わんとするものである。五家の分類は、清涼文益の『宗門十規論』が初出とされるが、それが定型化するのには、一一世紀後半から十二世紀初めとし、洪州の黄竜山を中心としていわれるようになったのではないかと推測する。「1 五家語録と四家語録」において、『黄竜四家語録』の成立から、『慈明四家語録』の成立に触れ、同時に馬祖—百丈—黄蘗—臨済の『四家語録』の成立を考え、四家語録の成立と五家宗の意識の密接な関係を指摘する。「2 『瀋山語録』の成立」では、明代の五家語録の一つとして成立する過程を述べ、『瀋山語録』の性格は、五家語録の時点で編集総括されたものであり、それ以前の編集成立

ではないとするのである。そこで、その出典を『伝燈録』『広燈録』『聯燈会要』『五燈会元』との関連で示し、参考に『祖堂集』をかけた、結局、出典の中心になったものを、『五燈会元』と断定している。³ 『瀧山語録』のもつ意味⁴で、『伝燈録』の話の約二倍となった『瀧山語録』のもつ意味は、楊岐派の圓悟、仏鑑のところに瀧仰が再評価されたことを指摘している。そして、その結語は次のように締められる。

瀧山語録は長い禅の歴史の背景をもって成立した。それは通常の語録とは異質であった。五家の分類が成熟した中で、最終的帰結として人為的に成立した。成立の背後に曹洞以外の四家は馬祖下であるという考え方のあったことは留意しておくべきであろう。

瀧山語録によって瀧山その人を知るべきではない。むしろ黄竜楊岐派下の禅思想の一端を、伝燈録と対比することによって、その中から汲み取るべきであろう。(四四三頁)

この節のタイトルは「流動と展開」である。鈴木博士は、語録それ自身が流動と展開を秘めていることを明らかにし、さらにその性格を知悉し、限界をわきまえながら史料批判によって禅宗史を構築していこうとする態度は、禅籍を扱う者の心しておかねばならないことであろう。

「第三節 雪峯と玄沙」は、本書の中で最も高い評価が与えられている所といえよう。雪峯と玄沙の本格的研究の先鞭をつけられたばかりではなく、随処に鈴木博士の学風があらわれていて、しかも大胆な構想がみえるところである。

雪峯と玄沙の基本資料である『雪峯語録』と『玄沙広録』の厳密な内容分析ははじめての試みである。雪峯と玄沙の伝記の基本資料

である黄滔撰「福州雪峯山故真覺大師碑銘」の訳と林激撰「唐福州安国禅院先開山宗一大師碑文并序」の訳注の初めての試みが、禅宗史研究上に特筆されるべきことは前篇の中にも紹介しておいた通りである。両者の研究上において欠かせないすべての資料の厳密な批判分析に加えて、閩の社会的背景や地理的環境が詳細に論ぜられているところに今までの研究に全く無かった点がある。

「二 戒律を重視した雪峯義存」では、「一 戒律重視の傾向」において、先師芙蓉靈訓の影響と分析し、弟子の玄沙師備、竜冊道愆、竜華靈照、羅漢桂琛、南嶽惟頸、竜興宗靖などにも戒律重視の傾向が伝わっているとする。² 戒律重視の立場をとった原因¹において、第一芙蓉靈訓とその時代の影響。第二に雪峯の性格。第三に雪峯の外護者、特に王審知の姿勢、の三つから原因をとらえる。「3 戒律と坐禅」において、戒律重視の雪峯の禅法の具体的な例を、贊寧の『宋高僧伝』にある「杜默禅坐」の語を手がかりに、禅宗の最も基本である坐禅に立ち返らせた点を指摘するのである。

玄沙伝では、『玄沙広録』が、「玄沙の言動の記録ではあるものの、一面に、招慶(慧稜)が一家として確立していく貌」(四八一頁)とする興味深い分析がある。さらに「四 玄沙の禅思想」で、特に玄沙と『首楞嚴経』との関係を明らかにされた点は出色のものといえよう。¹ 玄沙と首楞嚴経と道元と²では、まず、雪峯宗の成立しなかった理由として、第一に、弟子が多彩をきわめたこと。第二に、雲門と法眼に特徴があらわれて、この二派が一家を形成したこと。第三に、雪峯自身の禅法に顕著な特徴を示さなかったこと、をあげ、「渾然とした雪峯の禅は、雲門宗と法眼宗という対照的な禅風に分化したといえるのである」(四八二頁)と述べる。そして、玄沙を

法眼宗の形成のもとをおさえ、玄沙の禅思想の背景は『首楞嚴経』であることを、贊寧の「玄沙は楞嚴に乗じて道に入り、識見天殊なり」の語を手がかりに分析するのである。「2 長水の義疏注経を通して見た首楞嚴経の論破形式」において、『首楞嚴経』が阿難の考である実体的なものを論破することによって真実を見るところを構造で成立していることを、長水子璿の『首楞嚴経疏注経』二十巻を参考にして明らかにする。「3 玄沙の禅思想基盤」では、具体的に玄沙が『首楞嚴経』をどのように取り入れ自己の禅風にしたかを「(1) 首楞嚴経の依用」「(2) 首楞嚴経を通してみた玄沙の表現」「(3) 経論語録の引用からみた玄沙の思想」で分析する。そして「4 玄沙の禅風」において、玄沙自身は、思想的基盤を『首楞嚴経』に置きながら、『首楞嚴経』という名を何ら挙げることなく自由自在に自己の禅風を展開したと結論している。ここに雪峯にみられなかった思想があり、玄沙が法眼宗の基盤としての思想を確立した点を見出されるのである。この節は、全体の中では珍しい鈴木博士の分類でいうところの宗学の色彩がみられ、それだけに思い切った分析した箇所に出合うのである。問題点をあげるならば、前篇(二八七頁)に少し触れられる玄沙の臨済批判と玄沙の禅風との関係や入矢義高教授の「雪峯と玄沙(上)(下)」「『禅文化』一〇六・一〇七号、昭和五七年一〇月、昭和五八年一月)で示される玄沙の全面的自己批判をどのように把握していくかの問題もあろう。道元禅師と玄沙に関しては、拙稿「三百則でつづる中国禅宗史話劬」(『傘松』五一号、昭和六一年四月)で触れたことがあるので、それに譲りたい。いずれにしても、『首楞嚴経』と禅宗の関係は、禅宗史の上で大問題であり、その問題に一石を投じられた意義は決して小

さくはないことだけは誰もが認めるところと思われる。

「第三章 機と偈頌」は、以上紹介した中にも見出せたが、鈴木博士の独自の方法论とその成果である。「第一節 禅における機について——時機観と関連して——」では、「時」と「機」の語例を分析してまとめられたものである。「1 稀薄な時機観」では、「一体に禅門においては、いわゆるの時機観についての意識は極めて乏しい」と言われるが、ここに「いわゆる」が使用されているところが重要であり、正像末や上中下根などの分類やその対処方法が説示されていないからといって、禅問答がもつ真剣さと緊張感こそ重要であることを忘れてはならないであろう。

「第二節 禅思想表現としての偈頌」では、「1 偈頌の成立過程」を「1 偈頌の独自性」「2 古徳に仮託された偈頌及び偈頌の発生」「3 偈頌の盛行」「4 偈頌のはじまり」「5 偈頌のはじまる以前」「6 偈頌の基本的性格」に分けて解説する。そして「禅僧のことばや行動は全て自己の境界を述べ、宗旨を学人に示す底のものであるべきである」(五三四頁)と述べて、言語とさとの表現の問題として提示される。また、「文学的な基準で偈頌を評価するのは、偈頌の性格を正しく理解していないからである」(五三五頁)とする説は、この問題を語る場合の重要な提案ではあるが、一方に「いとめる」ことの困難さは、かの鏡清道愆の「出身猶可易、脱体道底難」(『雪竇頌古』四六則)の語からも言われることである。

つづいて「2 唐代の偈頌」では、「1 問題の設定」「2 司空本浄章における文章形態と偈頌の位置」「3 問答の詩的表現」「4 詩たるべき条件」「5 偈頌の特徴」「6 禅と詩の結びつき」に分

けて論じ、特徴を(1)思想、(2)品性、(3)情感、(4)感覚、(5)想像力、(6)表現力、(7)言句形式、(8)音律の面から明らかにしている。筆者はこの方面に対する基礎力がないので、その分析の評価については十分になしえないところである。

四

本書の概観は、以上で終った。系譜や地図の附録をはじめ、本書は中国禅宗史、あるいは唐五代の禅者を調べるときに欠くことのできないものであり、今後、何度も何度も参考にされるべき性質の書といえよう。本書に残された地域の分析、特に臨濟、趙州といった禅者の研究や初期禅宗と宋朝禅以降の禅宗の研究も解明されていくことにちがいない。

ここで、全般にわたる感想を述べてまとめにかえておきたい。第一は著者がとられた地域別の特徴をあきらかにしていかけた課題は、さらにもっと細かな地域設定がなされることよって明らかになっていくものがあるように思われる。その時の解明される内容は、禅宗史のワクを越えていかねばならないと思われる。

竺沙雅章博士の「福建の寺院と社会」(『中国仏教社会史研究』所収、同朋舎、昭和五七年二月)の論文によれば、『淳熙三山志』に基づいて寺院の経済基盤が分析されている。地域の特徴は、一つの寺院の経済情況の分析を通してより明らかになっていく面を有している様に思われる。筆者は、副論文と共に南嶽における禅宗の動向を分析された箇所を興味深く読むことができた。著者もいわれるように南嶽は道教のさかんな地方であり、実際に訪れてみてもその印象の方が強い。地域の特色は、もはや禅宗だけの動向ではとらえき

れないのではないかという感を強くした。地域をさらに限定して、宗教の複合形態や宗教の社会的基盤を明らかにしながら、禅宗の特色を語る時期が来た感がある。『景德伝燈録』による地域別の特徴を語った本書は、細かな点に意見を異にする人はいるかもしれないが、同じ方法で別の結果を求める研究者はもういないのではないか。それ程に鈴木博士の成果は、完成されたものと筆者は考える。故にその方法は、より深く、より細かな方法を求められるのではないかとと思うものである。

第二は、本書の成果に基づいて、禅者の禅風を語って欲しいと思う。たとえば、五家語録としての『瀋山語録』の性格は本書に分析されたところである。また、その節の目的を十分果たされているので、その箇所では十分であろう。だが、読者は「瀋山語録によって瀋山その人を知るべきではない」(四四三頁)という箇所を読めば、それでは一体「瀋山その人」とはどんな禅風の持ち主であったのかという知識欲が頭をもたげてくるのは筆者ばかりではないと思われる。その場合、『語録』がもつ口語の特色を十分に伝える時期が来ていると思われる。

第三は、地域研究には、現在可能な実地調査とを合せながら進める必要性を感じることである。現在の中国の受け入れ態勢は十分であるとはいえないし、地方史研究も宗教の分野までは及んではない。しかし、現地に行くことは、この種の研究において全く利がない訳ではないと思われるので、どうしても並行して研究を進めて行く必要があるであろう。聞くところによると、鈴木博士は来年実地調査を計画中のことである。本書の成果を新たに確認されてのちにいかなる発表をされるのかいまからのしみである。その成果を

大いに期待したい。

以上の三点は、本書の読後感である。筆者は、鈴木博士の学恩に最も大きく浴している一人であり、『中国禪宗人名索引』『唐五代の禪宗』そして本書の三部作は、机辺から離すことのできないものである。筆者と博士の関係は、『論集』七号の博士の処女出版の紹介のときに触れたので、ここでは再び取り挙げないことにしよう。

ふりかえると、今、確実に言えることは、学問は日進月歩であることだ。そして鈴木博士は、その成果をきちっとした形でまとめられた。これらの著を踏み越えて前進しなければならぬ。先日、博士にお会いした時に、「先生の分野は、あとを歩くものは落穂もひろえない程完璧ですよ」と話すと、博士は、「禪宗史は、鈴木大拙、宇井伯寿といわれる世界的な学者が樹立された学問であるから、ある種のプライドをもたねばならない。研究課題はうんとあるが、自分の本が踏み台になれば幸せである」と言われた。博士の言われるように、後退は後進の者には許されぬと思う。

最後に一言添えておきたい。鈴木哲雄博士は、現在、最も充実させている年齢である。今後の活躍を大いに期待するものである。筆者の批評の言辞は、いつもの無いものねだりの感があり、偏った個人的な見方のために、本書の紹介に十分な意を尽せなかったことを深くお詫びして、本書の一応の紹介を終えることにしたい。

(山喜房仏書林、昭和六〇年一月二五日発行、B5判、本文五
七四頁、地図五枚、英文レジメおよび索引六五頁、一五、〇〇〇
円)